

電子版

西南学院大学
博物館ニュース

vol. 1 2020.5

Ⅰ 特集

博物館と
新型コロナウイルス
感染症対策

イントロダクション

大学博物館と新型コロナウイルス感染症 — 2

デジタルアーカイブと SNS の活用

教育普及活動の場として — 3

大学博物館と教育

今、大学博物館のコレクションに学ぶ — 5

博物館の新型コロナウイルス対策事例

海外ミュージアムのコロナ対策 — 7

国内博物館の取り組み — 8

西南学院大学博物館 — 9

博物館の社会的役割から考える — 10

大学の起源から考える — 11

電子版博物館ニュースという試み — 12

2019年に発生が確認された新型コロナウイルス感染症は、2020年5月現在、世界規模で蔓延し、各国の文化・教育をかつてない危機に脅かしています。我が国においても、音楽や演劇など会場集客型の事業で収益を得ている文化を中心に深刻な影響が見られており、その影響は博物館界にも広がっています。丹青社が運営する「インターネットミュージアム」の調査によれば、現在までに全国で1184の博物館が臨時休館を実施しています(5月13日現在)。休館するということは、ひとが「展示」を観る機会を遮断するという措置にほかなりません。博物館の中心的な機能である「展示」を断念せざるをえない状況は、博物館にとって、存在意義に関わる深刻な問題であると言えます。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大は、学校教育にとっても、かつてない危機となっています。全国の学校が一時休校を余儀なくされている状況で、学生の主体的な学習・研究が求められる大学においては、対面授業の禁止ないし制限、大学図書館をはじめとする大学諸施設の閉鎖により、学生も教員も著しい苦境に立たされています。

博物館も大学も共に、その事業の根幹が揺るがされているコロナの時代にあって、博物館にも大学にも属している「大学博物館」は何を為すべきなのか。これが大学博物館に勤めている私たちの課題です。大学も博物館も門を閉ざしているのだから、大学博物館にできることは何もない、という意見もあるかと思えます。しかしながら、キャンパス内での学生への対面教育だけが大学教育ではないこと、博物館の事業は展示だけではないこと、これらの事実を鑑みれば、大学博物館もまた、その継続的な活動を断念すべきではありません。大学では教職員の努力によって遠隔授業のシステム構築や電子書籍の充実が急速に進められており、博物館では学芸員たちの努力によってデジタルアーカイブの拡充や SNSを通じた教育普及活動が盛んに行われています。そうであるならば、大学博物館もまた、展示以外のさまざまな活動を推し進めていくべきでしょう。

私たち大学博物館の職員には、展示による学生教

育以外に何ができるのか。この問題に対する解答の方向性は、近年の博物館学の展開が指し示しています。文部省学術審議会の報告としてまとめられた「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」を一つの契機として、我が国でも大学博物館に関して盛んに議論されてきました。それらの議論を通して見えてくるのは、大学博物館が持つ社会的な役割です。大学博物館は、大学の学生や研究者だけのものではなく、大学と市民を繋ぐ社会に開かれた窓であり、生涯学習の期待に応えるための教育施設です。そしてその教育的機能は、展示教育に限定されず、種々の情報メディアを通じた教育にも開かれており、またその幅広い活用が期待されています。ゆえに、私たち大学博物館の職員は、コロナの時代にあっても、情報メディアを活用して、学生だけでなく市民全体の知的関心に応えられるような「博物館的コンテンツ」を提供する責務があります。このたびの「電子版博物館ニュース」もまた、そのような観点から企画されたコラム集です。

本企画では、当館の職員(学芸系)が九つのコラムを執筆しており、それらのコラムは大きく三つのテーマに分けられています。すなわち、①「博物館の新型コロナウイルス感染症対策事例紹介」、②「臨時休館期間における西南学院大学博物館の活動紹介」、③「(大学)博物館における教育普及事業の意義についての考察」の三つです。①のテーマは、博物館という施設一般がコロナの時代にいかにして対応しようとしているかを知るために役立つでしょう。②のテーマは、西南学院大学博物館と同様の環境で経営している大学博物館ないし中小規模博物館に対する事例研究として役立つはずです。そして③のテーマは、各博物館が今後どのように活動を継続していくべきかという経営戦略を立てる上で、その戦略を支える経営理念を確認する際に参考になるでしょう。

博物館の新型コロナウイルス感染症対策はまだ始まったばかりであり、本企画もまた、黎明期なりの報告に留まるでしょう。ですが、本企画が少しでも後の調査研究に役立ち、また読者の知的関心を満たすものとなることを願っています。

Ⅰ デジタルアーカイブ事業

デジタルアーカイブとは「図書・出版物、公文書、美術品・博物館品・歴史資料等公共的な知的資産をデジタル化し、インターネット上で電子情報として共有・利用できる仕組み」(総務省「知のデジタルアーカイブに関する研究会開催要項」2011年2月)です。いまやインターネットが社会基盤として欠かせない時代となり、全国の博物館でデジタルアーカイブ事業への取り組みが活発化しています。

西南学院大学博物館では、2017年度よりデジタルアーカイブ事業の一環として、博物館が所蔵する資料の一部をデータ化し、ホームページでデータベースとして公開しています。ここでは当館のコレクションの三本柱である「日本キリスト教史関連資料」「キリスト教文化関連資料」「関谷定夫コレクション」と平戸藩の的山大島(あづちおおしま)に関する史料群「松澤氏収集文書」を公開しており、キーワード検索にも対応しています。各資料の詳細(所蔵機関、コレクション名、資料番号、表題、年代、形態、内容)や画像が閲覧可能で、資料画像の利用についての申請についてもご案内しています。

また、2019年度には大学の教育支援プログラム「大学博物館における『デジタル・アーキビスト』養成プログラム—資格取得とデジタルアーカイブ事業の実践を通じ—」を実施しました。本教育プログラムは、大学博物館が雇用している学芸調査員(学部生・

院生)を対象とし、デジタルアーカイブに関する専門知識の習得と実践経験を通じて、次世代のデジタル・アーキビストを養成することを目的とするものです。受講者(2名)は当館の博物館教員によるデジタルアーカイブに関する基礎知識の教育を受けたのち、NPO法人日本アーカイブ協会が提供する4日間の教育プログラムを受講。同協会が実施する検定試験にのぞみデジタル・アーキビスト資格を取得しました。資格取得後は、デジタルアーカイブ事業の実践として、当館のデータベースの拡充に従事しました。

所蔵資料のデータベースのほかにも、ホームページではGoogleが提供するインターネットサービス「ストリートビュー」を活用し、常設展示室およびドージャー記念室をパノラマで閲覧できるページも設置しています。また、過去の展覧会で刊行された図録をPDFで無料公開するサービスも実施しており、デジタルアーカイブ事業は今後も継続、発展させていく予定です。



西南学院大学博物館ホームページ
常設展示室のストリートビュー



西南学院大学博物館ホームページ
「西南学院大学博物館所蔵資料データベース」
マリア観音像

Ⅱ SNS の活用

現在、西南学院大学博物館で運用しているSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)は以下の三つです。

Twitter(@seinan_museum) 2012年～

Facebook(@seinanmuseum) 2012年～

Instagram(seinan_museum) 2017年～

タイムリーな短文投稿と不特定多数への拡散を特徴とするTwitterでは、展覧会やイベントなどのお知

らせ、親しみやすさを基調とした博物館スタッフによるタイムリーなつぶやきなどを行い、運用しているSNSのなかでは一番の更新頻度を誇ります。画像付きの長文投稿が可能で、実名制のため比較的フォーマルな印象のあるFacebookでは、博物館事業や専門性の高いコラム(博物館実習の報告や所蔵資料の解説など)を定期的に更新しています。若年層をターゲットとするInstagramではビジュアルを重視した画像投稿を心がけています。

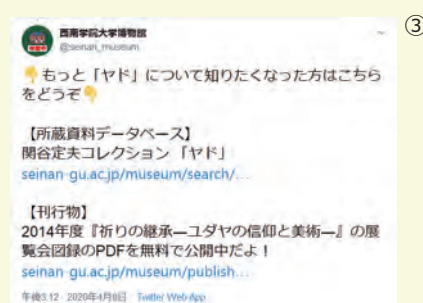
■ 教育普及活動の場として

今回の新型コロナウイルス感染症の影響により、西南学院大学博物館は2020年の4月から長期の休館を余儀なくされました。博物館職員もほとんどが自宅待機となり、博物館での活動が休止となりました。こうして博物館において最大の教育的機能が望める展示の場が閉ざされたとき、光明をもたらしたものがデジタルアーカイブであり、SNSであったのです。全国の博物館でのインターネットを介した教育普及活動は、前代未聞のこの危機において新たな道を切り開こうとしています。

西南学院大学博物館では、外部から博物館サーバーへのアクセスはできないため、ホームページ上で公開されている既存のデジタルアーカイブとSNSの資源を活用する必要がありました。休館中でも学びの場を提供できないかを模索した結果のうちのひとつがTwitterでの「ジョージくんクイズ」という試

みです。「ジョージくんクイズ」は臨時休館期間中の特別企画として連載を開始しました。ジョージくんとは、福岡県指定有形文化財でもある博物館建物をモチーフにしたマスコットキャラクターで、名前は建物の建築様式「ジョージアン・コロニアル・スタイル」に由来しています。博物館の所蔵資料に関するクイズをこのジョージくんが出題するかたちで、不特定多数に向けて発信されるTwitterの特性を鑑み、親しみやすさを演出しました。出題するクイズの資料画像は、データベースで公開しているものや無料公開している図録の画像などを使用し、解説も専門性よりも簡潔でわかりやすさを重視しています。その代わりに、より専門的な知識を得る手段として、資料のデータベースや関連書籍(図録)などへの誘導も同時に行いました。連載前より他館からの教育普及活動に関する呼びかけのなかにあったTwitterタグも利用しました。また、Facebookでも刊行物や所蔵資料の紹介などといった学芸調査員(学生アルバイト)によるコラム連載を実施し、学生教育や雇用の機会を創出しています。

こうしたデジタルアーカイブやSNSを活用した教育普及の動きは全国の博物館で行われ、発展を見せています。前代未聞のこの危機において教育普及活動の新たな道が切り開かれようとしています。



Twitter「ジョージくんクイズ」
(2020年4月8日より開始)

- ① クイズ
画像の資料に関する問題を出題する
- ② こたえ
簡単な解説とジョージくんの豆知識など
画像には関連資料や図解などを掲載
- ③ デジタルアーカイブサービス
出題問題の資料データベースや掲載図録や
資料解説のある刊行物への誘導

■ 大学博物館で学ぶ「博物館の世界」

西南学院大学では、1年生から4年生まで、すべての学部の学生を対象として「博物館の世界」という授業を開講しています。今年度も100名以上の学生が、博物館のコレクションを通じて、キリスト教の歴史や文化を学んでいます。

西南学院の旧本館であるドージャー記念館は、改修工事を経て、2006(平成18)年に博物館として開館しました。1920(大正9)年に礎石が置かれたこの建物は、今年、着工から100年を迎えました。W・M・ヴォーリズの初期建築を代表する煉瓦造りの旧本館は、学院の象徴とも言うべき美しい建物です。しかし、残念ながら一度もこの場所を訪れることなく、卒業を迎える学生もいます。こうしたなか、すべての学生に開かれた「博物館の世界」の授業は、学院の旧本館である博物館に学生が足を運びきっかけともなっているのです。

■ 建学の精神のかたちとしてのコレクション

さて、博物館の展示室には、美しい聖書写本、イコン(聖像画)、ユダヤ教の祭具、そしてキリスト教の取締りに関する古文書など様々な資料が並んでいます。これらのコレクションは、博物館に先立って設立された神学部聖書資料室の収蔵品や寄贈など、長年にわたって蓄積されてきたものです。そして、その収集には、歴代の教員や学芸員など多くの人たちが関わってきましたが、常にその中心にあったのは本学の建学の精神であるキリスト教主義です。授業では、これらのコレクションを通じて、その根底

にある建学の精神を学んでいます。

今年度は、博物館のホームページに掲載された図録や所蔵資料のデータベースを活用した遠隔授業を行っています。これらのデジタルアーカイブ資料は、本学の学生・教員に限らず、すべての方が利用できるものです。ここで、西南学院大学博物館のコレクションの中から、歌川広重(三代)による「横浜商館天主堂ノ図」を紹介したいと思います。

■ 「横浜商館天主堂ノ図」

連日テレビに映し出されるのは、人の姿が消えた街。こうした街の様子を見ていると、物寂しい気分になります。そんな時に眺めると元気が湧いてくるのが、開国後間もない日本の街の賑わいを描く開花絵です。1870(明治3)年に描かれた歌川広重(三代)の「横浜商館天主堂ノ図」には、開港場横浜の様子が生き生きと描き出されています。そこからは、通りを行き交う人々のおしゃべりや馬車の走る音が聞こえてくるかのようです。

この絵の中央に描かれているのは、1862(文久2)年に横浜の居留地80番に献堂された、開国後最初のカトリック教会の聖堂である横浜天主堂です。1858(安政5)年に幕府がアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスとのあいだに結んだ安政五カ国条約により、箱館(函館)・神奈川(横浜)・長崎・新潟・兵庫(神戸)の開港、そして江戸(東京)・大坂(大阪)の開市が決定しました。これに伴い、条約締結の外国人のための居留地が設けられました。開港以前、横浜はわずか100戸たらずの村でしたが、開港後は日本最大の貿易港として発展していきました。



横浜商館天主堂ノ図

1870(明治3)年、歌川広重(三代)
紙製、木版色摺、3枚続
西南学院大学博物館蔵

当時、日本人は許可を得れば居留地の中に居住することができ、そこで働く人も少なくありませんでした。居留地は外国人と日本人が共に働いて交流する場であり、そこには近く期待される日本人への布教に備えて来日した宣教師たちもいました。

安政五カ国条約では、来日する外国人の信教の自由は認められましたが、日本人に対しては依然としてキリスト教禁制が続いていました。こうしたなか、横浜天守堂が献堂された1862(文久2)年に、この場所で事件が起こります。教会に集まった日本人に向かって宣教師が説教をしたことが問題となり、説教を聞いた55人が捕縛されたのです。その後、フランスの公使ベルクールが神奈川奉行と幕府に掛け合い、「今後宣教師が日本語で説教をしないということとをパリ外国宣教会の宣教師たちに命令する」という条件で全員が解放されました。その翌年、1863(文久3)年のパリ外国宣教会の『年次報告』では、「役人から横浜天守堂の『天守堂』という文字を消すように勧告された」と報告されています。

この年、長崎ではフューレ神父とプティジャン神父が赴任し、翌1864(元治1)年に大浦天主堂が建設されました(1865年竣工)。横浜で事件が起こったにもかかわらず、大浦天主堂の正面には「天守堂」の文字が掲げられました。今日でもわたしたちが長崎の大浦天主堂を訪れると、この「天守堂」の文字を目にすることができます。そして、大浦天主堂の祝別式が行われた1カ月後、浦上村の12名から15名ほどの老幼男女が天主堂を訪れ、一人の女性が神父に尋ねました。「サンタ・マリアの御像はどこ」と。「信徒発見」として伝わる潜伏キリシタンの存在が顕わになった瞬間です。プティジャン神父は横浜のジラルド神父に送った書簡において、その時の様子を喜びと共に綴っています。しかし、当時日本は未だ禁教下にありました。長崎の浦上では1867(慶応3)年に百姓三八が仏式による埋葬を拒否したことにはじまるキリシタンの捕縛事件、浦上四番崩れが起こります。故郷を追われた浦上のキリシタンたちは過酷な拷問を受けました。こうしたなか、居留地で活動していた宣教師たちが母国のミッションに働きか

け、日本におけるこのような禁教政策に対する欧米諸国からの批判は高まります。そして、1873(明治6)年2月24日によろやくキリシタン禁制を掲げた高札が撤去されました。

居留地80番にあった横浜天守堂は1906(明治39)年に山手に移転し、「天守堂」の文字を掲げた当時の建物は残っていません。「横浜商館天主堂ノ図」は、かつて居留地にあった教会の様子を今に伝えていています。教会の正面には「天守堂」の文字が掲げられています。この絵が描かれたのは1870(明治3)年。それは、新しい時代を迎えた日本で、信教の自由が開かれようとする、日本キリスト教史における夜明け前の時でした。

外国人居留地に集った人々

約3世紀にわたる鎖国の時代を経て開国を迎えた日本において、外国人居留地は、人々が西洋文化と出会う場でした。そして、その出会いは、旧来の制度や価値観を変えていきます。

日本に来た宣教師たちは、居留地で聖書の翻訳や施療に従事しながら、日本人への布教活動に備えていました。こうしたなかで、聖書の教えに胸を打たれ、信仰心を起こす人もいました。1872(明治5)年には、禁教下にあった横浜居留地に最初の日本人プロテスタント教会である日本基督公会が設立されました。また、S・R・ブラウンが開いた伝道者養成のための塾では、のちに日本キリスト教界において指導的立場となる多くの青年たちが学んでいます。

そして、キリスト教禁制の高札が撤去されると、宣教師たちは本格的に宣教を開始しました。宣教師たちの私塾はミッション・スクールへと発展します。また、来日した女性宣教師たちが中心となって、日本でも女子教育が行われるようになりました。

長いあいだ鎖国の状態にあった開国後間もない当時の日本では、外の世界に対する人々の恐れや不安は大きかったのではないのでしょうか。しかし、開港場の外国人居留地には人々が集まり、そこでの出会いと交流から世界が拓かれていったのです。

新型コロナウイルスの流行により、博物館や美術館は感染拡大の懸念から休館・活動の短縮せざるを得なくなりました。欧米では、2月から3月頭にかけて多くの博物館・美術館などの文化的施設（以下ミュージアムとする）がそのような措置をとっています。人びとがミュージアムに行くことができないという事態に、欧米のミュージアムはどのように対応していたのか事例をもとに紹介します。

■ デジタルアーカイブの活用と拡大

ミュージアムにおけるデジタルアーカイブとは、一般的にミュージアムの収蔵品をオンライン上にデジタルデータで公開するものを指します。近年、様々な理由でミュージアムを訪問できない人びとにも収蔵品を楽しんでもらうことなどを目的として、デジタルアーカイブの整備が進んできました。そのようなデジタルアーカイブをこの事態に活かすだけでなく、デジタルアーカイブを拡大するミュージアムがみられました。例えば、イギリスの大英博物館はオンライン上で公開している画像コレクションに約28万点の写真と85万の記録を追加しました。もちろん、これらは無料で誰でも見ることができます。また、Googleが提供するGoogle Arts & Cultureも注目を集めています。このサービスでは、世界中の艺术作品を高解像度で鑑賞できるほか、ストリートビューでさまざまなミュージアムの館内を巡回できます（ミュージアムビュー）。約3,600ものミュージアムや文化財をその場にいるかのように閲覧でき、家にいながら世界各地を旅行しているような気分に入ることができます。思っているよりも臨場感があったので、まだ体験したことのない方には是非体験してみてください。

■ SNSでの活動

この事態の中、家にいても友人や家族とつながることができるSNSを利用する人は増えたのではないのでしょうか。そんなSNSを利用したミュージアムもありました。日本では、さまざまなミュージアムが「#おうちミュージアム」というハッシュタグを使用しTwitter上で展示品を紹介するという活動が見ら

れました。欧米でも同様にSNSを利用した活動が行われました。

例えばTwitterでは「#CURATORBATTLE（キュレーターバトル）」というハッシュタグで収蔵品が公開されました。これはイギリスのヨークシャー博物館がTwitter上で開催しているハッシュタグイベントで、毎週金曜日にテーマを発表しそのテーマに合わせて世界各国のミュージアムが収蔵品を公開するというものです。4月17日に発表された「CreepiestObject（不気味すぎるもの）」のキュレーターバトルは、日本でも話題となりました。

また、Instagramを活用したミュージアムもあります。4人のアート好きルームメイトによるアカウント(@covidclassics)が自宅で名画を再現したことをきっかけに、自宅で名画を再現してInstagram上でシェアする運動が盛り上がりました。オランダのアムステルダム国立美術館のInstagramのアカウント(@tussenkunstenquarantaine)ではそれらの投稿をアーカイブしています。ただ単に美術作品を鑑賞するだけでなく、美術作品を自分で再現して発信するという新しい楽しみ方ですね。特に、有名なムンク「叫び」を再現した作品はユーモアに溢れていて面白かったです。家の中にある3つのアイテムしか使用してはいけないというルールがあるため、さまざまな創意工夫を見ることができて新しい体験だと感じました。

■ 開館に向けて

感染が拡大していた欧米でも、徐々にミュージアムの開館が始まろうとしています。ドイツの一部地域ですでに開館したミュージアムもあります。感染が特に拡大していたイタリアでも、5月18日からミュージアムが開館する予定です。ただし、これらの博物館は一度に入館できる人数の制限・食毒液の設置・オンラインチケットのみ・クレジットカード利用限定の支払いなどさまざまな制約があります。いつもどおりのミュージアムを楽しめるまで、ミュージアムに関わる学芸員やスタッフの工夫はもうしばらく続きそうです。

年が明けてまだ間もない1月16日、日本で初めての新型コロナウイルスの感染者が確認されました。国内での感染拡大にともない、2月末には政府によってイベント開催見直しの要請が行われたため、国内の博物館は3月のイベントを中止にするなどの対策を行ってきましたが、4月に緊急事態宣言が発令されたことで美術館や動物園、水族館を含む多くの博物館が休館を余儀なくされました。そのような中で、日本での初期の感染者が北海道で相次いだため、ひと足早く2月29日から休館措置をとっていた北海道博物館が発案したのが「おうちミュージアム」という企画です。休館中でありながらも、公共に利益を還元する活動だとして多くの賛同が集まり、現在150近い博物館がこの企画に参加しています。全国の小中学校が休校となったことから、子どもたちが家で遊びながら学ぶことができる工作などが多数紹介されているほか、大人も一緒に楽しめるような企画も数多く発信されています。

Ⅰ デジタルアーカイブの拡大

国立科学博物館は「おうちで体験！かはくVR」と称し、休館中の博物館の中をウェブ上で自由に探検することができるコンテンツを公開しました。VR（バーチャルリアリティ）映像として鑑賞するには専用のゴーグル等が必要ですが、PCやスマートフォンのみで鑑賞可能な3Dビューの映像でも、十分な臨場感で楽しむことができます。さらに、5月1日には「THE WILDLIFE MUSEUM」としてVR博物館を開館。通常は非公開となっている貴重な剥製コレクションが公開されています。

また、福岡市博物館は、所蔵している甲冑や博多人形などの名品7点を新たに3D画像で公開し、普段の展示されている角度からは見えない部分を拡大するなど、さまざまな楽しみ方をブログで紹介しています。ブログではそのほかにも、「福岡市博休館中通信」で、まち歩きヒントや簡単な工作の紹介、Google Arts & Cultureへの掲載情報などが取り上げられています。世界中の2500以上の博物館や美術館が参加しており、館内や各館の美術品を鑑賞することがで

きる同サイトには、2016年から所蔵品の高精細画像データなどを公開していたものの、今回の自粛期間中にその存在を知った人も多く、好評を博しているようです。

Ⅱ SNSの活用

TwitterやInstagramなど、写真と文字のSNS上では「#エア博物館」、「#自宅でミュージアム」などのハッシュタグで収藏品などを紹介する動きが見られたほか、中止となってしまった展覧会の解説を行う取り組みなど、さまざまな工夫がなされています。これまでSNSによる活動がそれほど活発でなかった施設も、休館などの措置に伴い、所蔵品の紹介や見どころなどを発信する頻度が高まっている様子が見えます。

さらに、5月の緊急事態宣言の延長を受け、福岡市美術館、熊本博物館、国立歴史民俗博物館など複数の博物館が、他のSNSに比べ画質が良く、長時間の収録が可能なYouTubeのアカウントを開設しました。文字数や時間による制限が加えられないことで、より詳細なギャラリートークだけでなく、音楽・ダンスなど、従来の方法では館外での鑑賞が難しかった作品をより多くの方々に発信することが可能になっています。

しかし、このような取り組みがすべての博物館で十分に行えるわけではありません。5月13日には航空科学博物館が臨時休館による資金難のため、クラウドファンディングによって資金援助を求めたことが話題になりましたが、資金難に陥った際、文化財や博物館のための予算が真っ先に削減の対象になってしまうことは少なくないのです。

貴重な文化財を守り、より良い状態で未来の世代へ繋いでいくことと同時に、広く一般に公開し、正しい知識と価値を伝えることが博物館の使命です。たとえ利用者の方が来館できない状況であっても、デジタルアーカイブのさらなる拡充や、SNSによる情報発信など、新しい還元の在り方を模索していく必要が求められているのかもしれない。

福岡市に所在する当博物館では、新型コロナウイルス感染症対策として3月より換気やアルコール消毒の強化、3月中旬からは予定していた全ての講演会やイベントを中止するなど様々な対策を行ってきました。緊急事態宣言発令に先立って博物館の臨時休館を決定し、4月に予定していた展覧会も延期としました。また、同月14日には職員のテレワーク体制を整え、博物館に常時出勤する職員は学芸員のみとなりました。さらに、5月4日の緊急事態宣言延長を受け、臨時休館並びにテレワーク期間を5月末まで延長することになりました。このような流れの中で当館が行ってきた臨時休館中の取り組みについていくつかご紹介したいと思います。

■ 休館中の施設・資料管理や教育普及活動

休館中も最低限の人員が出勤し、施設と資料の管理を行っています。また、この機会に常設展の更なる充実も図っており、すべてのキャプションを英訳し、掲示できるよう作業を進めています。そのほか、学外への対応としては他博物館や海外の研究者からの問い合わせ対応、学内への対応としては、秋に実施予定の博物館実習の打ち合わせなどを行っています。また、SNSを利用した教育普及活動も並行して行っています。国内の多くの博物館が利用しているハッシュタグを用いたり、当館独自の臨時企画を開催したりと、自宅に居ながら当館の収蔵品を学び、お楽しみ頂ける取り組みを実施しています(右図「SNSを使った教育普及事業」を参照)。



西南学院大学博物館ホームページ(2020年5月14日時点)

■ 「大学」という側面から

西南学院大学博物館は大学に付随する博物館であるため、職員は大学の博物館学に関する講義も担当しています。今年度は当館の学芸員が「博物館資料論」「博物館展示論」「博物館情報・メディア論」「博物館経営論」を担当し、また館長・学芸員・学芸研究員がオムニバスで「博物館の世界」を担当しています。「博物館の世界」では、西南学院大学博物館を教材として博物館の運営に関わる様々な項目を取り扱っています。博物館が所蔵する資料や聖書博物館についての概要のほか、実物の資料の取り扱いや教育普及事業の企画などをグループワーク形式で行い、学生の実践的な能力の向上を目標としています。博物館含む大学諸施設が閉鎖中の現在は、これらの担当科目を遠隔授業で実施しています(宮川コラムを参照)。

SNSを使った教育普及事業

Twitter

ジョージくんクイズ

子供向けに、当館の収蔵品をクイズ形式で紹介するもの。「#エア博物館」「#おうちでミュージアム」のタグを使用。
▶ 5月12日時点で22回投稿済。

担当: 学芸研究員(教育普及担当)

Facebook

図録紹介

西南学院大学博物館で過去に発行した図録を学芸調査員が紹介した企画。図録の内容と調査員のおすすめポイント、実際に図録が読めるリンクを掲載しました。

▶ 2020年4月20日～5月2日まで更新。

担当: 学芸調査員

Facebook

壹週逸品

過去にも行っていた、当館の収蔵品を調査員独自の視点で紹介する企画。収蔵品の概要のほか、こちらも調査員のおすすめポイントが掲載されています。

▶ 2020年5月9日より毎週土曜日更新中。

担当: 学芸調査員

近年、博物館を取り巻く環境は日々変化し、博物館に対して多種多様な期待が抱かれるようになりました。なかでも、博物館の展示・教育機能に対する期待は高まっており、その期待に応えることが、博物館の日頃の活動の成果を発信し、子どもから大人まで幅広い年齢層に興味や関心を与える機会の向上にもなっています。そこで、本コラムでは博物館の社会的役割について、その教育的機能の観点から述べたいと思います。

■ 博物館の社会的役割

はじめに、博物館の担う社会的役割について考えてみましょう。博物館の象徴的活動として、教育学習活動が挙げられます。この種の活動は、1980年代から90年代に欧米の博物館で注目され、のちに日本でも脚光を浴びるようになりました。時に教育学習が資料整備や調査研究と対立的に考えられることもあります。実際のところ、我が国で施行されている「博物館法」においては対立的に考えられていません。というのも、資料の収集・保存と資料を活用した教育普及活動は共に、博物館の基本的な活動として博物館法で規定されているからです。

博物館法第2条

この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む、以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行ない、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人(独立行政法人(独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三号)第二条第一項に規定する独立行政法人をいう。第二十九条において同じ。)を除く。)が設置するもので次章の規定による登録を受けたものをいう。

[下線は引用者による]

■ 教育学習施設として

教育学習施設としての博物館の社会的役割について、より具体的に考えてみましょう。たとえば、美術館においてもっとも重要視されている活動は調査研究ですが、この種の活動はその成果を社会に向けて発信することと直接結びついています。実際、調査研究の成果は、展覧会やその図録はもちろん、ギャラリーガイドやワークショップといった教育普及事業全般に反映されているのです。

また、子ども達の好奇心が惹きつけられる生物や化石、鉱物標本といった資料が揃う自然史博物館は、自然物を通じて感性と知性を育む場という役割を担っており、学校教育とは異なるタイプの教育を提供することができます。さらに、地域の自然と歴史を紹介することで地域とヒトの密接な繋がりを育むというのも、自然史博物館の重要な役割の一つであると言えます。

いずれの博物館においても、資料の展示という実物教育が活動の核であることは言うまでもありません。しかし、誰もが予期せぬ不測の事態が発生し、博物館をはじめとする文化施設が休館を余儀なくされた場合、施設内での実物教育は不可能になってしまいます。今回のパンデミックがそうです。この場合、博物館という教育学習施設は、通常通りの運営ではその役割を十分に果たすことができません。そのため、休館中の博物館は、パンデミックの中でもその社会的役割を果たそうとするならば、展示以外の教育学習方法を検討していかなければなりません。ゆえに、我々博物館の運営に携わる職員は、実物教育が困難な状況にあっても教育学習施設としての社会的役割を果たすべく、利用者がそれぞれの自宅で所蔵資料を鑑賞できる環境の整備など、さまざまな代替方法を模索する必要がありますでしょう。

【参考文献】

日本博物館協会編『博物館研究』Vol. 48, No.1, 通巻535号, 2013年。
全国大学博物館学講座協議会西日本部会編『新時代の博物館学』, 芙蓉書房出版, 2012年。

大学の起源から考える

大学博物館は、何故、コロナの時代にあっても教育的活動を継続しなければならないのでしょうか。本コラムでは、「大学の起源」という観点から、大学博物館の教育的責務について考えてみたいと思います。

そもそも「大学」とはどういった場所なのでしょう。今日英語でuniversity(ユニヴァーシティ)と呼ばれる大学組織は、中世ヨーロッパのuniversitas(ユニヴェルシタス。ラテン語で「組合」を意味する)を起源としています。この組合の発生の誘因は「12世紀ルネサンス」と呼ばれる学問の大復興にあります。それまでの高等教育でも七自由学芸(セブン・リベラルアーツ)が学ばれてきましたが、12世紀、主としてスペインのアラビア人学者らを通じ、西ヨーロッパに古代ギリシアの医術書やローマ法のテキストなどの新たな知識が流れ込んできました。それらの新たな知を求め集まった熱心な若者たちが、教師と学生からなる組合「ユニヴェルシタス」を形成したのです。

かくして形成された教師と学生のユニヴェルシタスは、次第に学生たちのギルドに限定されるようになっていったとされています。学生は自分たちの権利を守るために、組合を通じて市民や市当局に対して交渉を行い、さらには教師に対抗する手段としても使用しました。教師は、授業料に相当する知識を学生に与える義務を負い、「学生ギルドに無断で授業を休まない」「学生ギルドに無断で都市からでない」等の規則が決められていきました。他方、学生たちのユニヴェルシタスから締め出された教授たちが作った「教師組合」がカレッジでした。カレッジに入るためには一定の資格が要求され、学生たちは学職の証明として教授免許を求めるようになりました。この免許が、現在の大学制度にまで受け継がれる「学位」の初期のかたちです。現在、「修士(マスター)」「(元々はギルドの親方のこと)や「博士(ドクター)」「(教授者の意)といった上級の学位に使用される言葉も、当時から「大学教師」を示す言葉として使用されていました。

このように、制度や名称の点で、中世に現れたユニヴェルシタスと現代の大学は確かな連続性を有しています。その一方で、両者の間には多くの相違点も存

しています。まず、最初期のユニヴェルシタスは建物を持ちませんでした。パキエ(Étienne Pasquier, 1529–1615)が述べているとおり、中世の大学は「人びとで作られて」いました。さらに、式典や制服なども、一部の大学を除いては連続性に乏しいとされています。これらの要素は、大学の起源ではなく、大学の形成過程ないし発展過程で付加されていたものなのです。

上述の歴史的過程をふまえたうえで、「大学の本質とは何か」と問うならば、それが建物(キャンパス)や式典(行事)でないことは明らかです。当然、制度や名称でもありません。そういったモノや形式ではなくて、パキエが歴史的な視点から正しく見抜いているように、それを作っている「人々」こそが大学の本質なのです。つまり、「知を求めて集まった人々(学生)と、その人々へ知を教授する人々(教授)によって形成された教育組織であること」こそが大学の本質なのであり、現代においても変わることはない大学の存在意義なのです。

近年我が国では、「就職予備校」という俗語が示しているように、大学を就職のための一通過点として考える傾向が強まっています。しかしながら、その起源に立ち戻って考えるならば、大学とは「知」によって結びつけられた人々の組織であり、「知」を求めることと「知」を授けることこそがその使命とされなければなりません。ゆえに、大学の教職員は学生の教育にこそ専心すべきであり、大学に属する教育施設である大学博物館もまた、学生へ「知」を授けるさまざまな教育的手段を模索し続けるべきなのです。

【参考文献】

C. H. ハスキンス『大学の起源』青木靖三、三浦常司共訳、八坂書房、2009年

このたびの『電子版博物館ニュース』は、新型コロナウイルス感染症拡大をうけて企画された西南学院大学博物館の新事業の一つです。2006年に開館した西南学院大学博物館は、開館以来さまざまな刊行物を社会に発信してきました。それはたとえば、展覧会図録や研究紀要、資料叢書、年報などです。紙版の『博物館ニュース』（既刊39号）もその主要なコンテンツの一つです。これらの刊行物はすべて、紙媒体で出版・印刷され、一部は pdfデータが博物館ホームページで公開されています。ですが、紙媒体なしに電子版のみで制作・公開されたのは、この『電子版博物館ニュース』が初めてです。本コラムでは、この新たな試みの企図について、三つの主要な観点より解説したいと思います。

■ 情報発信の迅速性

電子媒体のメリットの一つは、「情報発信の迅速性」です。紙媒体の場合、完成した原稿を印刷業者へ入稿し、校正を経て印刷され、博物館へ郵送（納品）されることで、ようやく私たちの手元に届きます。刊行物の内容や校正スケジュールにもよりますが、このプロセスには数週間から数ヶ月の時間を見積もるのが通常でしょう。たとえば西南学院大学博物館の『博物館ニュース』（紙版）の場合、入稿から納品まで一ヶ月を見積もってスケジュールが組まれています。

このような紙媒体のスケジュールと比較して、電子媒体の場合、必要時間の大幅な短縮が期待されます。というのも、電子媒体の場合は「印刷所での印刷」と「郵送による納品」のプロセスを丸々省くことができるからです。さらに、博物館でグラフィックデザインのスキルを持つ職員を雇用している場合、スケジュールはさらに短縮されます。なぜならば、原稿の作成から完成まですべてのプロセスを、外部業者を介さず、博物館内で完結させることができるからです。実際、西南学院大学博物館の『電子版博物館ニュース』は、業者を介さず博物館内だけで完結させていますが、そのスケジュールは入稿から完成（納品）まで10日間という、紙媒体では到底実現し

えない短さでした。

このような「情報発信の迅速性」は、刊行物で扱うテーマによっては非常に重要な要素となります。今回の新型コロナウイルス感染症対策のように、政府・社会の動きが日々急速に変わってゆくテーマの場合、特にそうです。紙媒体で『博物館ニュース』を刊行した場合、これを読者に届けられるのは6月中旬以降でしたが、6月中旬の状況はこの企画を立てた5月上旬時点では全く予測できませんでした。したがって、今回の特集に際しては、情報をより迅速に発信できる「電子版」を選んだわけです。

■ 印刷・郵送の負担削減

近年、日本の博物館は一般的に予算削減を迫られており、それゆえ従来の体制・内容で経営を行うことが困難になってきています。刊行物に関して言えば、印刷費が減れば刊行物の質や量を抑える措置が必要となり、郵送費が減れば刊行物の発送対象を絞らなければならなくなります。人件費が減れば、印刷費や郵送費がふんだんにあったとしても、職員の労働時間内に収まる作業量でなければ刊行物を完成させることは不可能です。このような予算減少の傾向とそれに由来する博物館の苦境は、「コロナ不況」の影響により、今後ますます拡大していくように思われます。

このような刊行物に関する予算的な負担を少しでも軽減するためには、どのような対策を講じれば良いのでしょうか。答えの一つは「紙媒体から電子媒体への移行」です。この移行は、刊行物関連事業に要する諸予算を大きく引き下げることができます。まず、印刷費と郵送費はほとんどゼロになり（館のプリンターで校正用紙を印刷するなど、ごく僅かな費用はかかるでしょう）、人件費も、印刷業者との打ち合わせおよび郵送作業にかかる手間が無くなるため、多少は抑えることができます。したがって、電子媒体で博物館ニュースのような定期刊行物を制作することは、予算の問題に苦しんでいる館にとっては有効な対策となり、現在は予算が確保できていても将来的には減ずる可能性がある館にとっても検

討すべき選択肢となります。もちろん、各媒体の需要は館によって異なるため、電子版か紙版かの選択は、予算だけでなく、来館者をはじめとするステークホルダーの傾向も加味して、総合的な観点から検討すべきでしょう。西南学院大学博物館もまた、このような検討を経て、『電子版博物館ニュース』の刊行という試みの実行に踏みきることになりました。

■ 専門性の強化

刊行物を制作する上で必ず意識しなければならないのは、その読者です。どのような読者に手に取って欲しいかで、刊行物の内容から配布方法に至るまで、やり方が大きく変わってきます。たとえば、西南学院大学博物館の定期刊行物である『博物館ニュース』（紙版）は、刊行後に館内で無料配布し、ステークホルダーにも幅広く郵送することを目的としており、それゆえ記事の内容は適度に専門性をおさえつつビジュアルを重視するなど、小学生から高齢者まであらゆる社会層の方に楽しんでもらえるような内容にしています。他方、『電子版博物館ニュース』の場合は、同じ博物館ニュースではありますが、内容の方向性を大きく変えています。その変更点は、一言でいえば「専門性の強化」です。

ホームページやSNS上でのみデータを公開・配布することが前提の刊行物は、紙媒体で無料配布される刊行物に比して、読者層が狭まります。想定されるのは、当該博物館ないし博物館全般に強い興味を持っている読者か、知的好奇心の強い読者です。そうでなければ、博物館のホームページやSNSアカウントにアクセスして、pdfをダウンロードし、それに目を通す、というプロセスを我慢してはくれないでしょう。そのような読者がより関心を持つであろうコンテンツとは何か。それはおそらく、博物館のホームページをざっと閲覧すれば得られるような展覧会の情報やワークショップの活動写真よりは、さまざまな専門的知見を有する博物館職員だからこそ提供できる専門性の高いコンテンツではないでしょうか。そのように考えたため、今回の『電子版博物館

ニュース』では、パンデミックに対する現場の人間の分析と提言という、比較的専門性の高いテーマで特集することになりました。

上記三つの観点より、「電子版博物館ニュースという試み」の企図は理解していただけたかと思います。この試みが当館の経営において功を奏するか否かは定かではありませんが、時代状況に応じてそれぞれの館がそれぞれ新しい試みをするということ自体、大きな意義があることだと考えています。『電子版博物館ニュース』だけでなく、時代状況に応じたさまざまな企画を、今後も西南学院大学博物館は試していきたいと思います。

■ 編集後記

いま、私たちにできることはなんだろうか。

博物館で集うことが叶わず、博物館の大きな役割である展示という機能が十全に果たすことのできない状況において、博物館で働く私たちに何ができるのだろうか……。未曾有の事態において、しかし、このように考え行動する機会が得られたことは、今後の博物館のあり方に新たな可能性や発展をもたらす契機となるのではないのでしょうか。

4月からの緊急事態宣言から一カ月半を経て、全面解除となった現在。博物館を含む文化施設が開館に向けて新たな体制の構築を急ピッチで進めています。これからの博物館がこういった姿になるのか、博物館史の節目に私たちはいま立っています。

学芸研究員 山尾彩香

■ 執筆者（掲載順）

- 下園 知弥 （西南学院大学博物館学芸員）
山尾 彩香 （西南学院本学博物館学芸研究員）
宮川 由衣 （同）
鬼束 芽依 （西南学院本学博物館学芸調査員）
迫田 ひなの （同）
早田 萌 （同）
内野 舞衣 （同）
勝野 みずほ （同）

[電子版] 西南学院大学博物館ニュース vol.1
特集「博物館と新型コロナウイルス感染症対策」

発行日 2020年5月25日
編集・発行 西南学院大学博物館
福岡県福岡市早良区西新3丁目13番1号
TEL.092-823-4785（博物館事務室）
URL <http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/>